

阿蘇西斜面→干拓地と都城シラス盆地の畜産経営を主体に見た農地利用比較

早川康夫(九州農業試験場)

HAYAKAWA, Y. : Topographic Characteristics of Aso Western Plateau and Miyakonojo Basin and Effects on Their Farm Management

畑作は水田に比べ価格保証などの安定化助成策が薄く、企業の要素のある核作目を持たためと経営が成立し難いものである。暖地は気候的条件に恵まれ、核作目が多数成立可能で多岐にわたることが、暖地畑作の特長とみなされている。阿蘇北外輪と横島干拓地を東西に結ぶ線上には各種の核作目を持つ経営が並んでおり、しかも九州農試がその線上にあって各種資料をとりそろえ易い。

外輪草原(水田との複合肉牛)―西麓裾野台地(酪農・肉牛)―裾野末端域(植木の西瓜)―金峰山北隣山地(蜜柑)―横島干拓地(酪農・いちご)

これに対し南九州は都城→大隅半島シラス台地(酪農・複合肉牛・露地野菜)になって水田との複合畑作の代表地域にみなされるが、むしろ特化作目の導入が遅れた地帯とみなされている。しかし都城盆地の二次シラス上には酪農団地が建設中で、立地的条件との関連を検討する。

1. 阿蘇西斜面→横島干拓地

1) 阿蘇外輪草原：カルデラ内の水田農家の入会地として肉牛放牧地に使っており、集中的な草地改良投資にもかかわらず、標高差400mのカルデラ急崖にはばまれて、集約利用が進まなかった。農家は水田を重点に数頭の肉牛を飼い素牛販売を行う複合形式で、第2兼業者が増え旧態の農業を守る地帯である。白川沿い大津、菊陽、合志町も同様で、たばこ、野菜、陸稲など雑多なものが混作されている。

2) 西麓裾野台地：阿蘇熔岩台上を侵蝕西下する合志川、菊池川及びその支流を含む緩波状台地で、農家は侵蝕谷面の水田域に街村を造って、台上の畑に通い作をしていた。1965年頃から主作の麦、甘藷の耕作が行詰り、その代替作物に飼料作が導入され、これを契機に酪農及び肉牛一貫仕上げを中心とする畜産集落に変わった。畑灌施設の完備によってかつての無水台地に大型専業畜舎を建てた農家があるが、水田と畑台地の較差は10~20mで、両者を併用集約化できたことが地形的に有利な条件であった。

3) 西野末端域：下層に不透水層の花房・変成岩層が横たわり、地下水盆を形成し5haに1本の割で深井戸が掘られた。始めは台上の畑の水田化をねらったが、1970年頃からの水田減反策によって、施設野菜に転じ西瓜の計画生産集落を確立させた。上記裾野台地が畜産に、末端域が施設野菜に進んだ理由について、前者においては農家が侵蝕谷平地面にあり、無水台地の畑への通い作の感じを捨て切れなかったのに対し、後者は台上で飲料水がえられ、台上に集村を形成していて、昔から雑穀の他に野菜を作り荷馬

車に積んで熊本の町に販出していた。交通の発達とビニール被覆技術の発達と共に量産体制を整え販路を全国に拡げたもので、両者間には立地的な差異が存した。

金峰山北隣山地：有明海に面した河内・小天は昔からの蜜柑産地であった。玄武岩質安山岩と有明海に面して霜が少なかったことが適地となったものであろう。この裏側玉東町は段畑として使われていたが、これが蜜柑奨励策によって1960年頃から蜜柑山となった。玄武岩質の傾斜地に蜜柑産地が発達する例として、島原の有馬町、垂水、東松浦半島、小城町などがあげられるが、蜜柑は地質的条件に敏感に反応する作物であり、角閃安山岩質の川尻側に蜜柑が植がらぬ理由でもある。

横島干拓地：菊池川左岸に造られた干拓地で、明治末までにできた部分は水田である。戦後先端部分に干拓をつぎ足したいわゆる昭和干拓地は完成が1972年であったため水田化ができず酪農に切換えた。各戸4haの割当地に借入地を加え、大規模な酪農を展開しているが、干拓地の飼料作は塩害、湿害を受け苦労している。

以上のような各種の核作物を中心に企業化した農業経営が並んでいるが、核作物の多いことが北海道など寒地畑作と異なる所であり、旭志町の酪農も全町農家のまが酪農、まが肉牛の一貫仕上げ、まが第2種業に近い水田農家と種々の経営型態が混在するのもその特長である。

南九州の畑作もシラスを基盤に置く火山灰台地である。都城盆地はかつての湖跡で、中央を流れる大淀川左岸は湖に流下堆積した2次シラス台地、右岸は扇状堆積地である。月野原、諏訪原はかつての湖底で、隆起後シラス台地になった。農家は侵蝕谷面での水田を中心に通い作をしていたが、1965年頃から前述旭志町台地と同様酪農を核作物に発展した。しかし右岸扇状台地は露地野菜を中心に肉牛が飼われ、複合農業の面影を残している。南九州で最も割切った企業的畑作を行っているのは、純畑地帯の薩摩半島南端で、知覧町の茶、山川町の大根などの核作物を中心に加工流通をも含めた組織を確立している。また佐土原海岸砂丘から大淀・一の瀬下流域の扇状地には施設野菜が発達するが、透水良好な砂質土壌で、豊富かつ安価な水をかけ嫌地を防ぎ半ば砂耕栽培のようで土壌本来の地力は問題にしてい

い。南九州の畑を代表するのは複合経営とされているが、大きな粗収益を挙げているのは企業化に踏切った専業農家である。